

## 皆と同じ道に行く

[聖書]サムエル記上 8章1～9節 19～20節

サムエルは年若い、イスラエルのために裁きを行う者として息子たちを任命した。長男の名はヨエル、次男の名はアビヤといい、この二人はベエル・シェバで裁きを行った。しかし、この息子たちは父の道を歩まず、不正な利益を求め、賄賂を取って裁きを曲げた。イスラエルの長老は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、彼に申し入れた。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。そこでサムエルは主に祈った。主はサムエルに言われた。「民があなたに言うままに、彼らの声に従うがよい。彼らが退けたのはあなたではない。彼らの上にわたしが王として君臨することを退けているのだ。彼らをエジプトから導き上った日から今日に至るまで、彼らのすることといえば、わたしを捨てて他の神々に仕えることだった。あなたに対しても同じことをしているのだ。今は彼らの声に従いなさい。ただし、彼らにはっきり警告し、彼らの上に君臨する王の権能を覚えておきなさい。」

民はサムエルの声に聞き従おうとせず、言い張った。「いいえ。我々にはどうしても王が必要なのです。我々もまた、他のすべての国民と同じようになり、王が裁きを行い、王が陣頭に立って進み、我々の戦いをたたかうのです。」

### [序] 大敗北の挫折体験

サムエルは30才の時、ペリシテとの決戦でイスラエルが大敗北する挫折を経験しました。育ての親であり、信仰の父であったエリを失い、神の箱は奪われ、神殿は破壊されてしまいました(サムエル上 4:11, 18)。日本が戦争に負けた時、私は13才の少年でしたが、それでも私は大きな衝撃を受けて人生の目標を失いました。私に剣道を教えてくださった小学校時代の受け持ちの先生は、教師を辞めて田舎の実家に帰ってしまいました。ですから30才のサムエルが受けた衝撃は、私の思いをはるかに超えて、深かったに違いありません。

神の箱はペリシテから7ヶ月後に戻されて、キルヤト・エアリムに安置されたのに、サムエルは拝しに行っていない。これは一体どうしたことでしょうか。彼はエリの許で育てられ、神の箱が安置されていたシロの神殿で寝起きし、そこで神の語りかけを聞いたのです。どうして神の箱を拝しに行かなかったのでしょうか。不思議ですね。

彼は神殿で育った30年の生涯を全否定される思いに陥り、深い懺悔と沈黙の日々を過す以外になかったのではないかと、私は想像します。サムエルの受けた大敗北の衝撃がそれほど大きなものだったのです。サムエルは祭司一族から離れ、神の箱とも接触を断ち、独り新しい歩みを模索しました。

そして士師・祭司の勤めを果たしながらも、悔い改めを迫る預言者の働きを始めたようです。「心を尽くして主に立ち帰ろう。そうすれば主はあなたたちをペリシテ人の手から救い出してくださる」(7:3)という彼のメッセージが、少しずつ少しずつ人々の心にしみわたって行きました。

20年たって、サムエル50才の時に、イスラエル全員がミツパに集まって「わたしたちは主に罪を犯しました」と告白できるまでになりました(7:6)。そして攻めて来たペリシテ軍に、祈りによって打ち勝つことができました(7:10)。人々が敗北の歴史から学んで自分を変えたとき、勝利を与えられたのです。さてそれから後に、イスラエルの人々はようになったのでしょうか。それが今日のサムエル記上8章です。

## [1] 王を求める民の声

サムエルの優れた指導力のもとにイスラエルはよくまとまり、ペリシテも国境を侵さなくなりました。平和な20年、しかしサムエルは次第に年老いていきます。彼は息子二人に士師の務めを分担させました。ところが彼らは、エリの息子たちと同じ様に父の道を歩まず、賄賂を取って不正な裁きをするようになりました。そしてこれがきっかけとなって、王制を求める声が大きくなったのです。

長老たちが全員集まって、サムエルに申し入れました。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください」(5節)。

サムエルは賛成できませんでした。イスラエルは神の民です。神さまが主としてご支配しておられるのですから、神さまのほかに王を求めるなど、間違っています。でも自分の息子たちの不正が原因でこのような間違った要求が出てきたことに、サムエルは深い責任を感じたことでしょう。彼は恩師のエリが、息子たちのことでどんなに深く悩んだかを身近に見ながら育ちました。そしてエリとその家にくだった痛烈な神の裁きを、目の当たりにしたのです。

その自分がエリと同じ誤りを繰り返しています。自分の家庭教育の失敗が、人々に王を求める誤りを犯させようとしているのです。ですから人々を責める資格がありません。ただただ神さまにお詫びを申し上げる以外になかったのではないのでしょうか。嘆きの祈りに対する神さまの答えは、慰めに満ちたものでした。

「彼らが退けたのはあなたではない。彼らの上にわたしが王として君臨することを退けているのだ。——今は彼らの声に従いなさい。ただし彼らの上に君臨する王の権能がどういうものなのかを教えて、はっきり警告しておきなさい」(6～9節)。

そこでサムエルは皆に教えました。王を立てて外国の圧力に対抗する軍事力を持つとすれば、専門の軍人を雇い、よい武器を整えなければならない。公務員も必要になる。彼らの給料のために土地を没収され、税金も重くかかってくる。王のためにいろいろな労働にかり出されるようになる。そ

して遂には国民全体が王の奴隷になってしまうぞ。でもそれが王制の当然の性質なのだから、その時になっていくら泣き叫んで祈っても、事態は変わらない。それでもよいのか(11～18 節)。

しかし長老たちは言い張りました。「いいえ、我々はどうしても王が必要なのです。我々もまた、他のすべての国民と同じようになり、王が裁きを行い、王が陣頭に立って進み、我々の戦いをたたかうのです」。神さまはサムエルにおっしゃいました。「彼らの声に従い、彼らに王を立てなさい」(19～21 節)。

## [2] 平和の道の基本

イスラエルの民は、モーセに導かれてエジプトを脱出し、後継者ヨシュアのもとでカナンに定住しました。ヨシュアの後が士師の時代ですが、士師記の終わりにダン族がエルサレム近辺に割り当てられた土地から、勝手にずっと北に移動してヘルモン山の麓のライシュに住むようになった顛末が記されています。

5人の勇士が土地探しに派遣されました。彼らは北上してライシュに来ました。そしてすぐに引き返して報告しました。「非常によい地だからすぐに攻め上って手に入れよう」。そしてわずか 600 人の部隊で襲いかかり、住民を殺して占領してしまいました。士師記はこう記しています。「その地の民が、シドン人のように静かに、また穏やかに安らかな日々を送っているのを見た。その地には人をさげすんで権力を握る者は全くなく、シドン人からも遠く離れ、またどの人間とも交渉がなかった」(18:7)。

権力を握って支配する者がおらず、皆が穏やかに安らかに暮らしていたとは、なんと美しいことでしょうか。でも周りの世界と没交渉に暮らしていた結果、滅ぼされてしまったのですね。周りの国がいつ攻めてきて自分たちを滅ぼすかわからないという厳しい世界情勢が、イスラエルの人々の心に次第に強く意識されるようになってきたことを物語っています。

ですから武力を整え、いざ戦争となったら陣頭に立って敵と戦い勝利をもたらしてくれる王が欲しいと長老たちはサムエルに訴えたのでした。ライシュの人々が平和に暮らしていたのに 600 人のダン族に滅ぼされてしまったのです。身近な歴史が教えるこの恐れの方が、王制のマイナス点よりもはるかに大きいと思うようになったのです。

神さまはこの歴史の流れをお認めになりました。そしてサムエルにおっしゃいました。「彼らの声に従い、彼らに王を立てなさい」。問題は新しく立てられる王の支配が、神の支配に沿うものになるのか、打ち壊すものになるのかです。神さまの支配は人間を罪の奴隷から解放していくものです。しかし王制は本質的に人間を自分の奴隷にしていく動きを内にもっています。神の支配と王の支配とは鋭い緊張関係にあるということを知覚して、歴史の流れに対応していくことが、課題となってきています。

サムエルは12章の告別説教でこう語っています。「主はあなたたちに王をお与えになる。だからあなたたちは主を畏れ、主に仕え、御声に聞き従い、主の命令に背かず、あなたたちも、あなたたちの上に君臨する王も、あなたたちの神、主に従うならばそれでよい」(12:13～14)。そして王を任命する自分の責任をこのように述べています。「わたしもまた、あなたたちのために祈ることをやめ、主に対して罪を犯すようなことは決してしない」(12:23)。

サムエルが大敗北から学んだことは、心を尽くして主に立ち帰ることでした。人間が神を自分の僕にして使おうとすると、神と人間との関係がこわれるばかりでなく、人間関係にも破綻が生じるようになるのです。そして社会が乱れてきます。国と国との間にも争いが起こり、傷つけ倒し合います。ですから「僕になって神に聞き従うこと」こそ平和の道にほかなりません。王制であろうと、議会制民主主義であろうと、この基本姿勢は欠かせないのです。そのために神の言葉を語りつつ、国のために執りなしの祈りをしていく務めが、教会の役割として欠かせなくなってくるのです。

### [3] 大勢に流されずに進む

以前にもお話しましたが、全日本剣道連盟の機関誌に、当時話題になった映画「タイタニック」にちなんで作られたアメリカの小話が紹介されていました。「沈没寸前にタイタニック号から救命ボートが下ろされますが、子ども、女性、老人が優先で、成人男子は海に飛び込んでもらうしかありません。船長は先ずイギリス人男性に言いました。『あなたはジェントルマンであることを存じています』。彼は黙ってうなずくと、デッキから海に飛び込んでいきました。次はアメリカ人です。船長はこう言いました。『あなたはヒーローになります』。彼は微笑みを浮かべて飛び込みました。ドイツ人にはこう言いました。『これはルールです』。彼は毅然として飛び込みました」。さて日本人に対しては、何と申したのでしょうか。「貴殿はサムライである。婦女子のために一命を賭して欲しい」と言ったら、袴のすそをひるがえして、風のように波間に消えていったと言うのは以前の話で、今では通用しそうもありません。そこで船長はそっとこう言いました。「皆さんがそうしておられますよ。」——日本人は自分の命にかかわる重大決定をする時になっても、皆に合わせようとするという小話です。

でも今日のイスラエルの長老たちもまた、「すべての国民と同じようになりたい」と言い張っています。日本人だけではありませんね。ホッとします。周囲の国々が皆王を持ち強くなっているから、遅れをとってはならないと言う焦りが表わされています。しかし彼らの強く望んだイスラエル王国も 500年後には歴史から消えてしまいました。

ですから世界の動きをよく見極めながら、皆もしているからという大勢に流されずに進むことが大切です。そのためには、基本原理にしっかりと立ち続けなければなりません。大敗北から20年後に、イスラエルの人々はミツパに集まって神さまの前に悔い改めました。ペリシテの大軍に慌てふためいて武器をとることをせず、祈りをもって立ち向かいました。そして大勝利を得ました。彼ら自身が変わると、新しい歴史が開けてきたのです。

それからまた20年ほどの年月が過ぎました。そして歴史の流れの中で、いよいよ王が立てられる

ことになりました。そこでサムエルはもう一度確認しました。「主を畏れ、主に仕え、主の御声に聞き従い、主の命令に背かず、あなたたちも、あなたたちの上に君臨する王も、あなたたちの神、主に従うならばそれでよい」(12:13～14)。

私たちも、この言葉にしっかりと立ち続けることです。サムエルの生涯は、このメッセージを繰り返して語り続けたのです。サムエルに学ぶ私たちも、国の指導者たちや国民に対して、サムエルと同じ言葉を語り続けなければなりません。また国が道を誤らないように、執り成しの祈りをしていかなければなりません。

## [結] わが道を行く

今週の土曜日(23日)は沖縄慰霊の日(命どう宝の日)です。67年前に米軍大部隊が沖縄に上陸し、激しい地上戦が繰り広げられました。戦没者約 25 万人、その中に戦闘に巻き込まれて死んだ一般市民 9 万 4 千人も含まれています。そしてやっと平和がもたらされても、米軍基地の島という沖縄の現実は、依然として続いています。

原爆二発を投下され、広島、長崎を廃墟にされ、無条件降伏して占領軍に支配されるという、歴史始まって以来の大敗北を喫した日本でした。その中で二度と戦争はしないと決意して、平和憲法を制定しました。戦力を保持せず、戦争をしない国になると世界に宣言したのです。

これは丁度サムエルが、大敗北後20年かけて自分の深い悔い改めに基づいて、人々に主に立ち帰るよう説いて回り、ミツパに民全員を集めて、礼拝を捧げたことと、合致します。この時ペリシテ軍が大挙して攻めてきましたが、うろたえて応戦することはせず、心を合わせて主に祈りました。すると主は激しい雷鳴をとどろかせて、ペリシテ軍を陥れ、勝利をもたらしてくださいました。そしてサムエルの時代には、イスラエルを攻めることをしなかったのです。

そのイスラエルが、サムエルが老い衰え、息子たちが賄賂を取って裁きを曲げる有様を見て、王を持つ周りの国々と同じ道を歩もうと願いは始めたのです。これは、憲法を改正して、自衛のためには戦争の出来る普通の国になろうと主張する声が強くなって来た、今日の我が国の状況と軌を一にすると言えましょう。

ですからこそ私たちは、大敗北の経験をいつまでも忘れずに、主なる神さまに全幅の信頼を寄せ、平和憲法を持つ世界唯一の国として、我が道を行く決意を新にしたいと思います。

また父の日に当り、家庭教育に失敗したエリとサムエルの轍を踏まず、父親の役割を果たす者でありたいと思います。聖書には「父から鍛えられない子はあるでしょうか」(ヘブル 12:7)と教えられています。我が子を鍛錬、訓戒、懲罰するのは父親の役割なのです。

日本には「父は打ち、母は抱きて愛するを、異なる愛と 子は思うらん」という歌があります。我が

子がきっと恨んでいるだろうかと、鍛錬する父親の嘆きが歌われています。神さまは私たちを愛するゆえに鍛錬なさいます。困難や苦難を神の鍛錬として受取る信仰に自分自身が立ちつつ、父親の役割を担っていただきたいものです。

完